

失読失書を呈する症例に対する認知リハビリテーション

Cognitive rehabilitation for a case of alexia with agraphia

富永真紀子¹⁾, 仁井田りち²⁾, 田瀬 肇²⁾, 斎藤 文恵²⁾, 穴水 幸子^{2,3)}

Key Words : 認知リハビリテーション, 失読失書, 訪問リハビリテーション, 拡散テンソル画像, 社会復帰

はじめに

仮名の失読, 漢字の失書等の症状を呈する症例に対し, 約5年半訪問リハビリテーションにて認知リハビリテーションを実施した。本症例に対するタブレット型ITツールを用いた認知リハビリテーションについては, 石原ら (2015) によってすでに報告されている。今回は, 訪問による言語訓練の成果と生活面の変化, また拡散テンソル画像の解析結果について報告する。

1. 症例紹介

70歳男性, 右利き。教育歴14年, 仕事は学生寮管理人。主訴は「日報を漢字で書きたい」「職場の玄関ロックの解錠ができるようになりたい」。玄関ロックは暗証番号方式で, その入力パネルは数字配列が変わる仕様のため, 本症例は数字が読めず解錠できなかった。現病歴はX-1年に右後頭葉に脳梗塞, X年Y月に左側頭葉から後頭葉にかけて脳梗塞を発症。X年Y月+9ヵ月より訪問リハビリテーションを開始した。

2. 発症時神経症状

意識は清明。意欲, 感情, 人格に異常を認めず, 上下肢の明らかな麻痺や感覚障害はなし。視力低下と右下四分盲が認められた。

3. 神経心理学的所見

石原ら (2015) によって実施された標準高次視知覚検査, Rey-Osterrieth Complex Figure Testの模写, フロスティック視知覚発達検査の結果より, 図形模写困難, 色彩認知の障害が認められた。また複雑な図形では認知がより困難であることがうかがわれた。

4. 訪問開始時評価

基本的なADLは自立。外出時に駅の案内板が読めず, 一人で電車に乗ることができなかった。日常会話は文レベルの発話がみられたが, 喚語困難や錯語, 迂言等の症状があり話題に乏しく大人しい印象であった。文字音読では仮名文字が特に難しく, 文

1) 東京リハビリ訪問看護ステーション中野 Makiko Tominaga : Tokyo Rehabilitation Service CO., LTD

2) 慶應義塾大学医学部精神神経科 Richi Niida, Hajime Tabuchi, Fumie Saito, Sachiko Anamizu : Department of Neuropsychiatry, Keio University School of Medicine

3) 国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部心理学科 Sachiko Anamizu : Department of Psychology, School of Psychology and Healthcare Management at Akasaka, International University of Health and Welfare

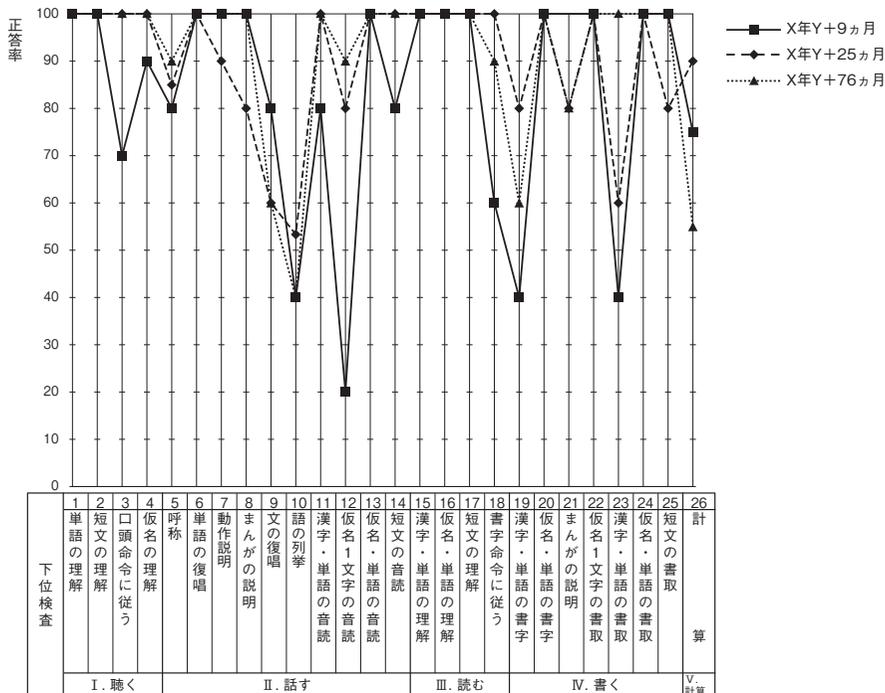


図1 標準失語症検査 (SLTA) 成績プロフィール

字を様々な角度から眺めたり文字をなぞろうとする様子がみられた。数字においても同様であった。漢字書字は、家族の名前等の身近な漢字でも困難であった。標準失語症検査結果においても、仮名一文字音読と漢字書字・書取の低下を認めた(図1)。

5. 画像所見

頭部MRIのT2強調画像では、X-1年に生じたと推定される右後頭葉の梗塞とX年Y月に発症した左側頭葉から後頭葉にかけての陈旧性の脳梗塞が認められた(図2)。左側については後頭葉~頭頂葉角回まで病巣は及んでいたと考えている。拡散テンソル画像では、前視床放線、帯状束、弓状束は描出良好であったが、脳弓、両側下前頭後頭束、鉤状束の描出不良が認められた。

6. 経過

【第1期 (X年Y月+9 ヵ月~ 24 ヵ月)】

数字選択課題、数字と仮名の写字・音読課題、漢字書字課題を実施した。仮名の写字・音読では、形状の類似した文字への誤りと印刷文字と症例の手書き文字の形状が異なる文字について誤る傾向がみられた。これは自己の平仮名一文字の表象が、本症例の手書き文字の形態に限定されていたと推測された。日常生活では玄関の解錠時の誤りが減少した。

【第2期 (X年Y+25 ヵ月~ 45 ヵ月)】

文章音読課題を追加した。仮名音読時にみられていた印刷文字と手書き文字が異なる文字の誤りは徐々に消失した。仮名一文字の写字・音読の繰り返しにより表象が拡大されたと推測される。日常生活では人に聞きながらも、一人で新幹線に乗り帰できるようになった。

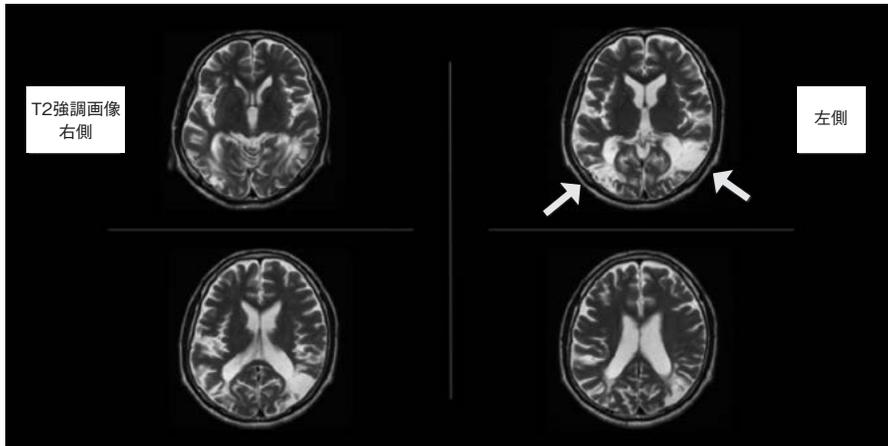


図2 MRI T2強調画像 (X年Y月+72ヵ月撮像)

【第3期 (X年Y+46ヵ月～76ヵ月)】

文章音読課題と漢字書字課題を行った。52ヵ月には携帯メールや駅の案内表示が読めるようになり、昔の知人との交流も再開した。形状の複雑な漢字書字にも改善がみられた。

行動は向上した。SLTAにおいても全体的に回復していたが、漢字単語の書字や計算は一時上がった能力が76ヵ月で低下している。年齢による変化あるいは、拡散テンソル画像上での深部白質回路が脆弱になっている可能性も示唆された。

7. 考 察

両側後頭葉脳梗塞の事例への長期的な関わりを示した。長期的訓練を多面的な方法で行い、日常生活

文 献

- 1) 石原裕之, 穴水幸子, 種村留美, ほか: タブレット型ITツールを用いた認知リハビリテーション—失読失書の一例における導入効果の検討. 認知リハビリテーション 20 (1): 17-25, 2015.